578
43

に連亘し且山勢火山質を帯び頗る雄大の觀がある其中余の登渉して絶巓を極めたものは北より順にいふと豐前の英彦山、肥後の阿蘇山、肥前の温泉岳、日向の高千穗山霧島山、大隅の櫻島山等である其形狀は又四國の劍山石鎚とは趣の違ふ樣にも考へるでそこで參考の爲め其概況を述べて見よう

其二　英彦山

英彦山は九州北部の高山で豐前豐後の堺に跨つて居るが彼の賴翁が耶馬溪記に海を隔てゝ鎭西の諸山を望むに彦山獨り秀づといふてあるは即ち是である余は此山に登つたときは小倉より香春に至りそれより行橋に出で桝田驛より始めて登つた元來此山は舊火山の石質安山岩で出來て居るけれど風化の爲め土壤を生じ全山樹木森々と打茂り坂路の左右など大木參差として翠を交へ綠を重ね一寸見ては火山特質の禿山の風景は見へぬ

山を七合位登つたところ少々谷合に平地が出來始めて人家を認めるが偖て其家が皆板葺で門口に何々坊といふ門札が掛て居る此はどうしたことかと尋ねて見ると凡そ本邦で山伏修驗者の修行を積むところは出羽の羽黑山遠江の秋葉山山城の鞍馬山偖は此豐前の英彦山等であつて諸國の修驗者が登山留錫して居る即ち此家等は皆其山伏連の住家であると分かつた偖それより十餘町進むと始めて彦山の町に達した町といふても彦山の凡八合目の斜面の稍平かな所に建てて居るので僅かに一筋の町であるが然し戸數は一百軒位もあ

つて思ひも寄らぬ高山の頂上近き所に碧瓦粉壁は少し仰山なれど板屋塁壁の民家肆店相連なつて鷄犬の聲が雲際に響くといふも一奇であると覺へた

此町の中央に一箇の大銅鳥居がある之より大石段を數百級攀ぢ登れば兩方には老木大樹天を掩ふばかりに生へ茂り且所々に石楠の花咲き亂れて風景いはん方なしであつた石段を登り詰めると一大神社がある是れ即ち官幣小社英彦山神社で俗に彦山權現といふは是れである社殿皆丸柱で盡く丹朱を以て塗り青丹よし奈良の都の諸建築を見る如しである此邊地高三千七百尺を拔き階上に立つて西北を望めば豐前方面の海は眞白く鏡を磨きたる如く展開し眺望の壯觀譬ふるに物が無い

嘗て廣瀨淡窓の彦山の詩を讀むに日暮天壇人盡去香煙散作數峰雲といふ句がある成る程此山へ登つて見れば始めて此詩の妙味がわかる彦山の山上高き處權現の社がある之に參詣する人が線香を燒き其より縷々と立上る煙が集まり夕暮に棚引きて山上數峰の雲となると何と詩的の光景であるまいか此日遂に彦山町の一旅館に宿したが高山の氣何となく淸爽で所謂六根の淸淨は求めずして之を獲た心地がした夜間例の道士山伏連が所所に法螺貝を吹き鳴らす其聲悽婉で人の腸を斷つを覺えた淡窓の門下中島子玉が彦山の詩に法螺吹落中峰月雲冷三千八百房といふ句があるが是も實境で彦山より他に移し難い話である此山は高山で別天地なるも北九州の名勝地で古來詩人の登つた人も數多い長梅外廣瀨旭莊等皆佳詩がある

余は此に一宿したが翌日路を改め豐前坊の方に向ふた彦山町より山の七八合目を一周して凡そ二里位行い

た所に絶壁の下に一庵がある是れ即ち豐前坊である此邊の光景も幽邃深遠で人間とは餘程離れた所と感じた是より山を下りて守實村に着したが是れ即ち有名なる耶馬溪である耶馬溪は元來此英彦山の川谷で山國川と呼ぶを山陽が雅稱して耶馬溪と呼び遂に其假稱で日本に聞へたものである近頃守實村の奥に新耶馬溪といふて山陽時代以後の奇景を發見して世に稱せられ居る今は九州線中津より輕便鐵道が分岐して此海内第一の山水(山陽の言葉を借る)と稱せらる耶馬溪を自由に隈なく一覽することが出來る

其三　阿蘇山

阿蘇山は九州は愚日本に於ても有數の大火山である特に其前世界に於て火坑の大なりしは今猶其跡が阿蘇谷南郷谷といふ直徑七八里近き大谷實は平地となつて居るでわかる近年此山に登山する者は年に數千人に及び何も特別に珍らしくいふ程でも無けれど余が登時の狀況を述べて見やう

余は熊本に客中賴山陽の詩を讀んだに大道平々砥不レ如。熊城東去總青蕪。老杉夾レ路無二他樹一。缺處時々見二阿蘇一といふ句があつた成る程熊本街道で時々樹木の缺げから阿蘇の山色黛の如きが見へる余は遊意勃發で一日之に遊んだ初日に先づ阿蘇の西腹湯谷温泉まで參つた此邊は全山火山の燒岩層を現し短草蕭條で別に樹木はない湯谷温泉は温度の强き溫泉で泉の本では卵も煮へる皆筧で浴室に取つてある關東の伊豆あたりでいふ走り湯である其日は温泉に浴し一泊して翌日山上に登つた

阿蘇山は山上數峰に分れ高岳往生岳中岳烏帽子岳等一坐をなし根子岳は分れ一峰をなして居る余は中岳から高岳の方に登つたが山頂の舊坑底は皆牧草成長して牛馬を放養してある遂に中岳の頂活火口に至つた廣さ數十間の灯坑まるで地獄の釜の如く坑底には硫黄たなびき五色の焰を燃やし中央一條の大黑煙柱轟然たる響を以て天に直上して居る壯觀言語に絶する但し此火坑の炎上は時々變化あり終始同一の狀況に一定して居るわけではなけれど大黑煙の一道渦巻き登るは相變らぬことで東國の淺間山と共に日本二箇所の大奇觀である

昔より九州の名山といひ一時は支那まで名が聞ゐ壽安鎭國山といふ名まで彼より寄せ來つた何にせよ名物山である余は夫より山を北に下り阿蘇谷の宮地村に至り國幣大社、國津神の阿蘇洛彦夫妻を祭れる阿蘇神社に詣で遂に熊本に歸つた

熊本は東に阿蘇山中央に金峰山(俗にキバウサンといふ)西に肥前の溫泉嶽と三箇の大火山連珠の如く相連り景色の雄大とても四國等の及ぶ所でない

其四　雲仙嶽

雲仙岳は肥前の島原半半島に峙ち島唯一山で頗る見事な火山である熊本百貫石より島原洋を隔てゝ之を眺むれば倒圓錐形即ち富士形の秀峯は兀然として海上に拔起し其の傾斜面の所謂裾野は優美に左右に延長し

其の山景の秀偉に壯麗なる本邦他に其比類を見ぬ彼の歐洲伊太利の畫にあるナポリを隔てゝベスビア山を眺めたる風景もよも之に過ぎじと想像さる程である余は百貫石より便船にて島原に渡りそこに一泊し次日同宿の連と二人して此山に登つた島原より山麓を南へ南へと迂回し遂に螺旋狀に山を旋りて登攀を始めた天草の二島、肥後の山脈は眼下に見へ爽快いはん方なしであつたが凡そ五里にして遂に山上、小地獄の温泉に達した橘南溪の西遊記に肥前の雲仙岳は山上三里登つて水田ありといへるもの誠に實境にして此海拔三千尺以上の高地に稻田の斷續谷間に開けるを見ては一驚を喫した小地獄には温泉宿若干ありて其有樣普通の温泉所に同じい

肥前には嬉野小濱等の名温泉地があるが此頃外國人等此温泉岳山上の空氣清爽を愛し別莊を開き夏期避暑地となす其有樣東國の輕井澤箱根に似いて居る此山寛政三年大破裂あり人畜の死傷極めて大なりしは今に記錄に慘鼻の談を留めて居る又彼の德川初期の歷史に有名なる耶蘇教匪の亂なる島原騷動といふは此山の東面原城に教匪の籠りて騷ぎ立ちたるものにて今は遺跡茫々として何等の尋ぬべきものを見ぬ余登山の拙詩二首がある

鎭西名將推ニ斯山一、壯擧唯宜レ試ニ一攀一、八面端姿蝙蠕態、宛如三鸞鳳舞ニ霄間一。

滿袖涼風身欲レ仙、一飛降盡氣飄然、危峰直立三千尺、恍訝斯身下ニ九天一。

近來此の山の名內外に聞へ九州の名勝地としては温泉は別府山は雲仙殆ど東洋一の名を擅まゝにし外國遊

覽客さへ絕間なきはめでたい

其五　高千穗山

日向に高千穗山といふが二ケ所ある一は北方の臼杵郡の高千穗山で一は南方の諸縣郡の高千穗山即ち霧島山である實際歷史にいふ天孫降臨の高千穗山は南方の霧島山のことであるそは國史の日本史天降降臨の條に日向襲之高千穗山とあるので分明である襲は日向の南方大隅の北方で昔の襲國又熊襲の地方で今日は大隅の曾唹郡と稱せられて居る所である北方の高千穗は襲といふ地名には何の交渉がない然し何國も同樣で土地の人我は佛尊し我田引水の論で天孫降臨の高千穗は我方であると北方の人は主張して居るそこで町村制施行の時にも高千穗などいふ名を取りて之を命名して居るが然し正史上には根據は無いそれは偖置き余は豐後の竹田より日向の三田井に參つた時其の北方の人のいふ高千穗山にも試みに登つて見た三田井は臼杵郡に在つて五箇瀨川上流の一盆地であるが此邊古墳もあり石器もあり上代アイヌ日本人種の已に分布散住して居たは珍らしい、天の磐戸と稱する所も見たが自然の岩穴で實に一顧の無いものであつた

高千穗山といふは三田井の西南二里許にありて山容三角狀をなし丁度土佐でいはば高知より望みた雪光山其儘である余一日之に登つたが一里許り手前より人家絕へ道問ふ人も無く心細く感じたが遂に山麓に達した此山は格別人の登涉するもの無きと見へ立派な道路が無い、木樵の通る小徑を攀ぢ或は谷を渡り岩を跨

ぎ二三時で頂上に達したが頂上は廣き數坪で樹木密生し格別の奇もない

余は茲に休んで携へた握り飯を食したが北方豐後の方を見れば祖母山傾山の高峰は手に取る如く目睫の前に現れ何といふても流石に高山の景色は壯大を覺へた歸途には路を失し大に困却し葛羅を攫んで谷を渉りはうはうの體で日の暮漸く山麓に達し夜に入り三田井の宿にかへつた跡で見れば手足を樹針石角で傷づけ散々のことであつた此時始めて不知案内の山に獨行して入るもので無いとしみじみ感じた

近來此の土地の人が昔の高千穗はこゝなりと百方宣傳を試みて居るが余は其の根據を淺薄なりと考へて居る

其六　霧島山

霧島山は九州南部の名山で山上の御鉢（土俗墳火口を御鉢と稱す）より常に煙を吐き且つ山嶺には有名なる天の逆矛立ちありて山中靈異の事多しとて兎に角有名なる山である

余は日向の都城に來り西北遙かに此山の雄姿を仰ぎ神往の念禁ずる能はず遂に登山を志し一日山下の霧島温泉に來り入浴した此邊地高く已に千餘尺を拔きたりと見へ櫻島の入海は眼下に見へ御嶽（櫻島山）は手を展ばさば其頂を摩すべきの想がある且境幽に地深く老木天を掩ひ晝暮く日中でも梟の鳴く聲が聞へる官幣大社霧島神社も此に在るこれは日本降臨の始祖邇々杵尊の尊靈を祀つてある所で即ち古史に天祖日向の高

千穗山に降りますといふ天祖を坐ながら其の高千穗山下に祭つたゞけである社殿を拜觀したるに島津家の古文書もあり神殿の扉に檜の一枚板を使つてあるに驚いた

偖一日登山に掛かつて道案内を一人雇ふたが山中で蛇の出ることがあるかわからぬといふて斧を一挺提げて居た余は橘南溪の西遊記を讀んで居たで霧島山中奇異の事多しといふを思ひ出し少し氣味惡く思ふた

此山は富士山と同じく山麓は木立で樹木天を蔽ひ中程は灌木で頂上は燒岩の禿山である先づ木立を通ると林木鬱々として天を掩い暫し日光も見へぬ此頃は墳火口の御鉢が日中二三回燃へ上るで其時間が來ると一陣の旋風がヅウーといふ音して山を掠め木立なる林木の梢は皆ざわざわと打騷ぎ暫して薄き灰がばら〳〵と降つて來る極めて物凄き感がした

一時間許りして木立を通り過ぎ灌木帶に入つたが始めて頭の上に青天を仰ぎ四面開朗で心地よかつた此灌木帶の盡きる邊に躑躅が處々に叢生して居たが予が登山は丁度五月で折柄其花が滿開で頗る美觀であつた予は自分合點で是が成程本家本元の霧島躑躅であらうと思ふたが其後牧野富太郎氏の書を讀むに霧島躑躅は必ず霧島山に成長せずといふことがあつたが然らば是は何躑躅であらう牧野氏の敎へを請ひたきものである

灌木帶より愈々山の八合目に出でたが偖予が登つて居たは東霧島山の方であつた霧島山は大山で頂上二峰に分れ東西霧島と呼ばれ或は韓國岳高千穗岳とも吟ばれ其中間の邊に活火口即ち御鉢がある此より愈々御

鉢廻りといふて火口の側を通ふつたが火口は眞白きは硫黄、眞黑きは炭酸瓦斯水霧は水蒸氣で此の三物が混和して直徑數十間の大坑底より渦卷き上つて時々灰をも混和し其天地自然の作用猛烈なるは實に言語にも述べ難く筆紙にも盡し難いが然しこれは火山としては自然狀態であらう

予等は戰々兢々で此の御鉢廻りをなし更に西霧島にかゝり燒石磊々たる阪路をたどり漸くにして其絕頂に達した此は海拔四千尺以上で火坑の煙も此まで屆かず折々は隙間があつて四方の眺望が出來る眼を放てば西は薩摩の海、東は日向の海、南は櫻島灣三方の海が見へ壯觀譬へん方が無い道案内がいふには極晴の時は長崎の海が見へると然し此日は煙靄の爲め見ることが出來なかつた此山頂數坪の所に彼の有名な天の逆矛がある高さ四五尺許り徑二三寸の鑄造銅矛で下方は燒石で埋め露はる所は三尺許り上方には左右鬼面を象つてある上古天孫降臨の時天孫此矛を執つて國を探り此に天降りまして其儘記念に之を立て置き給へりと言傳ふるも是は素より無稽の談にして三四百年前山伏修驗者共が祈願の爲めに建て置きしものならん然し古傳により兎に角此の矛は世に名高くなつたものである

土佐の豪傑坂本龍馬が慶應二年に妻阿良を連れ薩摩に下り西鄕氏等の勸により霧島溫泉に浴し遂に此山に登り此予を極め戲れに透矛を拔き其大小を試み再び之を立て置いたとは龍馬が實姉に寄越した手紙に精しく書いてあれば間違ない話である余は此で道案内と二人で握飯を食し暫し休息して元氣を恢復し夕方遂に下山した山中では幸に異事に出合はず恙なく再び麓の溫泉に歸着したは嬉しかつた西遊記の文は寫實なれど御鉢の記載は少し誇張があると覺へた

其七　櫻島山

偖余は九州を跋涉し著名な高山は北方より順次に登涉し來つたが遂に南方薩州に至り櫻島山に登つた此山は櫻島灣内に在つて山勢雄大で頗る鹿兒島の風光を添へて居る彼の山陽が

鹿子城中家幾萬、無三窓不レ入二紫羅顏一。

といふて居るが實に實況で鹿兒島市街のどこの人家樓上よりも此山の翠黛を眺め得ぬは無い櫻島は島の名で土地では山を御嶽といふ丁度土佐で越知の横倉山を他では横倉山といへど土地の人は御嶽山といふ樣なものである此島中巨大なる大根を產するは名高いことである

余は一日鹿兒島より櫻島に渡り有村溫泉に滯在入浴した有村の邊は海濱狹く浪打際より數步の所に溫泉がある高浪のときは浴室へ浪が打入るといふ奇しき所である偖又一日道案内を雇ふて登山したが鍋山といふ小火山の邊りより盤旋して登つたが山には相當に樹木が茂つて居るが猪兎が澤山で昔よりよき狩獵地であつたさうである然し櫻島山は三千尺の山で三時間位で頂上へ達した頂は二峰に分れ北岳南岳となり兩岳の頂きも矢張り舊火口の痕を存して居る余が登つたときは兩岳の間に一大火口があつて水蒸氣は無くて硫黄の白煙のみ縷々として何十條も立登つて居たが其光景は實に凄かつた然し硫黄の白煙でのみあれば晴天の

日は遠方には見へぬ樣に思ふた

此山に登れば北に霧島山の雄姿を仰ぎ南に海門岳の秀色を眺め風景又得もいわれぬものがある山上で中食し暫くして下山した此櫻島岳は十年前大噴火があつた樣であるがそは余が右に記載した昔の頂上の火口でなく山の西麓の横山方面であつたらしい自然作用の活動は人力の如何ともし難きことなれど鹿兒島の町は終始風上で何の損傷なかつたは仕合である

凡そ九州の山路はいづくも一樣に其里程を問へば昇り三里降り一里といふこれは九州至る所の常文句である成程疲勞の程度から言へば登攀は三倍の勞、下山は三分の一の勞是も面白き言樣である高山に登るは頗る愉快で身心共に稗益を受くる極めて大である聊か後の登山者の爲めこれを記載して置く。

第卅六　南部烈士相馬大作

第一　南部信直と津輕爲信

陸奥羽後の境に矢立峠といへる大山あり昔は秋田領と津輕領の界を限り奥羽街道の一要路たり山の最高點は約一千尺にして南方舊秋田領より入れば白澤驛より始めて山路に取りかゝり凡そ一里餘にて山頂に達しこれより又北の方に下る一里餘にして舊津輕領陳場驛に至る奥羽は一帶に寒威强く山々樹木少なく秣草山

のみ多かるにこゝは昔より名高き森林ありて老杉古檜參差として天を掩ひ白晝さへ日光透らずいとも物凄き景色なり

傳へ聞く文政の昔今の盛岡舊南部領の藩士相馬大作其君公宿世の仇たる津輕藩主津輕越中守寧親君を狙撃せんとし誤り縛につき江戸町奉行の糺問に逢ふて獄門に梟せられしといふ己巳て吉田松陰の東北遊記を讀みて略ぼ大作の事蹟を聞き心竊かに其壯烈に感じたりき後北遊此地を過ぎり其遺跡を探り且古老の物語を聞き其の遺事を尋ね武士道の精神を思ふて同情の懷にたへざりき

偖南部氏の遠祖は甲斐源氏にて文治五年源頼朝奥州征伐の時功を以て茲に封せられ爾來世襲して戰國の頃に及びき天正の頃藩祖大膳太夫利直公始めて盛岡に築き居り弟政信を津輕に封じ郡代となす然るに津輕の方面には其被官たりし津輕右京亮爲信君あり雄邁にして大志を蓄へ久しく人下に屈伏するを好まず遂に政信を害し封を領す是を津輕氏の藩祖となす津輕は地廣く物饒かに奥北の要鎭たりしが是に至りて隱然一敵國なる利直公怒り兵を發し之を討ちしも行程六七十里に餘り道路阻隔し且津輕の兵强きが爲め之を屈する能はざりき

此時天正十八年に當り豐臣秀吉公は正に海内を一統し遂に小田原を征し北條氏を圍む爲信公は先づ之に至り秀吉公に謁せしに公悅び君を遇すること世襲の大名に異ならず遂に四萬石の朱印墨付を賜ふて所領を安堵せり但後德川氏の時增封して十萬石と稱せり

已にして南部信直公も亦後れて至り豐公に謁し邊土路塞がり速かに達する能はざるを謝す豐公嘉納して所領安堵を賜ふ信直公訴ふるに津輕爲信は己が被官にして擅まゝに所領を横奪せる叛主なり速かに許を得て之を誅せんと豐公其事實を諒とするも已に一旦津輕家に朱印墨附を下せるを以て之を許さず信直君臣切齒憤怨するも如何ともなし難く南部津輕兩藩の對抗軋轢は實に此に始まれり

且津輕家の辨疏する所を聞けば爲信君八世の祖秀則、其子威信、孫元信、三人は並に南部家祖先の殺す所となる南部家こそ我津輕家宿世の仇なれ爲信君の政信を害するは父祖の仇を復するものにて叛主が君を弑すると異なれりといふ南部家は又其史傳の虛僞なるを說き紊訟紛々今に至り決せず

兎に角兩家の確執は天正以來顯著の事柄にて藩士相互の間にも隔意犬猿も啻ならずこれが爲め津輕氏は德川家の代に及び江戸に參覲往來をなすに南部の城下即今の盛岡を過ぐるを憚かり通常の奥州街道を取らず脇街道即ち矢立峠通りより南部領秋田領の中間街道を取り米澤より福島に出でしといふ

扨兩家の不和も此の如く相結で解けざる二百餘年にして頃は恰も文政の初頃に及びしに南部家には折柄家督の交代あり新藩主利用君は未だ若年にして猶無官にありけるに津輕家の當主越中守寧親君は爵秩を進めて已に從四位侍從に昇り將軍家の御覺も目出度く勢力隆々旭日の勢もて榮へけるに南部家の家臣は見るにつけ聞くにつけ慷慨の念禁ずる能はず扨は反逆の家筋は高位に登り勳舊の家門は卜位に沈む世にこれより奇怪の沙汰なし君辱しめらるれば臣死すとは此時の事なりいで報復の事を計らで措くべきかわと憤怨激昂

涙を呑んで其時節の到來をまつもの少なからず然して其最も果斷にして烈舉の魁をなせるは即ち相馬大作なりき。

其二　相馬大作の經歷

相馬大作は本と下戸米秀之進といふ名は將眞家世々南部藩に仕へ福岡に住す蓋其先相馬太郎將門に出づ依て後改めて相馬大作と稱す父は總兵衛といふ嗣子あり妻卒す繼妻を娶り大作を生む人となり倜儻大志あり常に慷慨節義を好み勇者烈士の談を聞く毎に自ら感激興憤しやむ與はず

兼てより津輕藩主が詭計を以て南部の藩地を侵略し擅まゝに勢力を扶植し一方の雄藩となり常に主家と對峙するを憤り且近頃南部の藩主新に封を嗣き位官猶低きに津輕の藩主ば爵位益隆に君臣主客の位置顚倒せるを嘆き機を見て報ずる所あらんとす是より日夜刻苦して武伎を修め刀槍の術一として極めざるなし父之を愛し嗣となさんとす大作家を繼ぐときは已が素志の成らざるを畏れ遂に脫走し江戸に走れり

此時江戸の室町に美濃屋作兵衛なる者あり南部の物產を鬻きて業とす任俠にして善く人を遇す大作投して主人となし良師を求めて益々武伎を磨かんとす作兵衛之を紹介して旗本槍術家夏目長右衛門の方に入門せしむ大作是より刻苦し自ら科を立て一日に槍を揮ふ一萬度氷結ぶ嚴冬の晨、汗玉なす大暑の夕といへど骨て一度も廢することなく其精勵根氣見る人舌を捲かざるなし夏目氏も其精力衆に越ゆるを感じ遂に盡く傳授

578
43

印可を授け猶當時有名なる平山士龍に托し更に其奥儀を極めしむ

平山士龍名は行藏といひ間宮林藏、近藤重藏と名を等ふし世に寛政の三藏と稱せらる文武兼備し藝道十八に達し名聲都下に震ふ門に登る者二千餘人あり然して大作又其門に在り精勵苦學直に同門を拔き吉田呑敵齋、小田武右歛門、松村伊三郎と名を齊ふし平山門の四天王と呼ばれたりかくて師家の許を得て自ら道場を開き子弟を集め武伎を授け日を送りたり已にして一旦鄉にかへらんとせしが途にして師家平山氏の訃を聞き馳て喪に會し再び北にかへる此時自ら六十匁の紙銃三把を製し試みて之を蓄ふ且つ屢矢立峠を往來し其地理を審かにし以て只管時機の至るを窺へり。

其三　矢立峠の義擧

翌文政五年は津輕侯恰も江戸より封に還らるゝの期なり大作竊かに喜び此期を以て宿志を果さんと欲し門人關良助、一條小太郎及弟龍之助、族庄藏、僕德平、及大吉等六人を誘ひ温泉入浴に托し鹿角に至り密に語るに心事を以てす皆大に喜び血をすゝりて盟ふ因て之を矢立峠に襲ふを約し故鄉の福岡にかへり暫し冬籠をなしたり

明くれば愈文政五年の春四方の深雪も漸々に解け初めて野邊の若草も色づく頃時分よしと德平を遣り探索せしめしに津輕侯は愈四月二十八日を以て矢立を過ぐる日取なりと報せしかば直に結束出發し先づ龍之助

德平は山腹に居り大煩を地中に埋め莊藏は嶺下の深林に隱れ紙銃を把り大作自身は小太郎外一名をつれ大舘白澤の間に往來し二銃を川堤に隱し若彼所に打誤れば此處に討留めんと用意おさおさ怠りなかりき

抑矢立の峠たるや陸羽の國境千山の爭聳せるの點にあり千年の老杉翳鬱として打茂り白晝日光を洩らさず矢立杉の名實に空しからず加ふるに道路崎嶇し馬は轡を並ぶる能はず人は轎を降りて步す誠に無双の絕險なり大作等六人は身に鎖帷子を着し腰に長刀を帶び意氣慨然二百餘年の積怨を洩らすは此一擧にありと勇氣日頃に十倍せり然るに是より先き大作嘗て大吉なる者をやり津輕侯の憩宿の狀を伺はしむ大吉はもと仙臺の人にして貧にして爲す所なく流浪して福岡に來る大作之を養ふ大吉感激して死を以て恩を報ぜんことを盟ふ是に於て斥候となり前發せしむ然るに中程志を變じ弘前に馳せて急を藩主に告ぐ一藩駭然として皆顏色を失ふ藩士大道寺壯士七百人を率ゐて矢立峠に急行して藩主を救ふ大作之を悟り切齒すれども甲斐なし

大道寺等已に至る關良助先づ山上の砲を發し之を擊つ火地中より發し山谷皆震動し炎飛び煙迸り草木皆燒く五人之に乘じ逃る津輕侯の君臣戰慄震恐し出づる所を知らずかくて越中守寧親君は駕籠を捨て徒行し白澤の民家に投じ夜微行し港に達せらる別に石を駕籠に盛り儀衛を備へて山中を過ぐ大作樹上に登り銃を手にし二丸を込めて竢つ駕籠過ぐ乃ち銃を發す彈丸駕籠を貫くも顧みずして過ぐ依て其空駕籠なるを知り大息し去る

大作等五人已に計蹉跌し一足も油斷すべからず倉皇藩を脫し江戸に走る津輕藩之を偵知し幕府の同心長井某に多くの貨賄を與へ之を捕へしむ大作等已に縛に就く町奉行の糺彈を受く大作揚言して曰く津輕氏の祖もと臣が祖と共に南部家の世臣なり後詭計を以て封地を奪ふ南部侯時に九戸（政實）の亂により之を征平する能はず恨を含み歿す臣民皆痛憤す今や又官位我藩主を超へ恬然耻づる所なし臣之を慨し一砲粉碎し二百年の怨を報すとせしのみと其他の諸人を鞫問す口供皆符合し毫も疑ふべきなし官即死刑を宣告し之を斬り首を小塚原に梟す實に文政五年八月二十九日にして大作時に年二十四歲なりき

抑も大作慷慨血性の身を以て深く藩國の浮沈を嘆き不俱戴天の仇を除きて祖宗の屈辱を雪かんと欲す其志操の潔烈實に天地を貫き日月と光を爭ふものといふべし惜いかな博浪の一擧誤て副車に中たり事ならずして身鼎鑊に就く然れど其氣骨稜々たる猶天下の僞英雄を震殺するに足る

今や星霜一百年矢立峠の山河形勢昔の如く旅店茶房の老媼猶ほ客を留めて大作の遺烈を說く薪取る山の賤女、秣草苅る村の牧童まで相馬大作といへば其名を知らざるなし元祿の昔大石良雄亡主の仇を復す年四十五思慮周密を以て志を遂け今に忠臣の美名を存す大作義は同しと雖も惜かな年少二十四歲謀深からず空しく蹉跌す然も其の公憤身を殉するは即ち相讓らず余は武士道の上より深く其の心事に同情す一詩あり

博浪一擊定何邊。誤中ニ副車一遺恨綿。我愛子房報韓志。精忠如レ日膽如レ天。

但大作の墓は今盛岡市本宮村感恩寺に設けられ心ある者猶歲時靑苔を掃ふて香火を手向くるを憐らずとい

ふ。（明治三十九年稿）

第卅七　高野山長宗我部氏墓

其上　戸次川戰死者の供養

天正十四年十二月十二日豐後國戸次川に於て長宗我部元親信親父子が三千の兵を提げ鶴が城の圍を救はんと出陣し薩將島津中務家久の二萬の大軍と大決戰を交へ衆寡敵せず遂に大敗し信親以下總軍殆ど全滅し空しく中津留川原の露と消へたるは極めて悲壯の哀史であるが當時土佐兵が勇戰奮鬪し爭ふて主將の馬前に死を急ぎ一人も身を全ふし逃げ還る如き卑怯者の無かつた事は敗ると雖も其の崇烈は猶千古の美談となすに足るものである

然して信親の屍体は戰後父元親の命により重臣谷忠兵衛忠澄が薩軍に使して之を求めしに薩軍禮を厚ふして之を贈るといふこと誠に武士道の精神にも叶ひ土佐軍記に其の有樣を記し

昔源平の〻戰の時敦盛の死骸をときせなかを門脇中納言殿へ熊谷送りたる樣思出し勇士の志神妙なりと感じける

敦盛の首級を熊谷より參議經盛に送つたことに比しであるは尤である扨谷忠兵衛忠澄は其の儘屍体を取つ

て歸らんとしたがこれも今は甲斐なきことなり只此迄の命なりと同行の惠日寺僧に命じ引導の上火化し其の遺灰を携へて高野山に登り奥院に葬つたものである

高野山に於ける長宗我部氏の墓は此の如くして出來たものであるが其の當時の有樣諸記錄に見ゆる左の如し

土佐軍記

元親土佐へ歸て信親吊の爲め長濱に一宇の伽藍御建立あり法名天甫常舜居士と謚す其外一所に討死する侍四十人總して戰死する士七百餘人の爲に百人の僧を屯し一千部の經を供養せらる家中の士國中の民百姓涙を流し天甫常舜居士を拜す

又高野山往生院谷藤ノ坊を宿坊となし信親の石塔を建て其前三筋に四十人の石塔立双て大卒都婆を建る朝夕法燈を排し看經勤行永代無二怠一法事被修けるこそ難有し其の卒都婆の文に曰く

豐後國大分郡戸次庄、戰死甲首七百餘人、同靈成等正覺頓証菩提、一偈云

功名永留武門中、按レ劍雄夫勢在レ空能動二山川一流二汗血一臘天十二一陣風

于時天正十四丙戌年十二月十二日施主秦元親建焉

元親記

信親死骸を申請度と惠日寺谷忠兵衛二人を島津方へ被差遣云々兩人御死骸を尋出す元親卿は死骸を取て

歸候へと宣つれども御尤ながら其は輪廻の道理也只是にて煙になし申さんと惠日寺導師を仕兩人致二才覺一御骨を取て歸る云々扨明る年百ケ日に當る時分忠兵衛此骨をもちて高野へ上り宿坊明光院にて致二御吊一奥の院に妙堂をたて信親の御堂を奥にして供しはてたる二千石より上の侍分も皆四十九院を兩脇に立る豐後にて打果たる分上下七百人餘總用には大なる石塔を立て奥院にて總祭に仕來りし也

土佐物語も略ぼ同樣の記載である要するに戸次川合戰後谷忠兵衛が信親の遺骨を携へ高野に登り奥院に墓を營み大石塔を建て尙墓前には從臣の小塔をも建て並べ歳次奠祭を營んだことは右の文に見ゆる通り相違なかつた然るに長宗我部氏は後十餘年不幸にして滅亡斷絶に及びたれば高野の墓も無緣となり是より忽ち荒廢懷頽に歸し空しく寒煙衰草の中に埋沒せられ見る影を失ふたことは疑ない物換り星移り歳月殆ど四百年高野山上に尙長宗我部氏の墓が存在するや否やといふことは疑問であつた

其下　奥院の美景

元々高野山上で今日奥院一の橋より中橋玉川橋をへて大師廟に達するまで十餘町の間諸國大小名貴賤の墓五輪塔林立其數殆ど幾十万に達して居るが大抵は江戸時代德川時代以後の物である譬へば加賀前田利家仙臺伊達政宗薩摩島津義弘の如き堂々たる侯伯の輪塔屹然として左右に並んで居る其の間に長宗我部氏の如き斷絶の大名が無緣の墓を其の儘に維持する事は極めて覺束なき事と考へらる

然るに高野山の記錄には長宗我部の墓は筑後有馬家庄内酒井家の墓の間に記載してあれば昔より山上に其の遺塔と傳說の存して居る事は疑ない明治三十年餘初めて高野に登山し一乘院に投宿し寺僧の案内を以て其の墓を搜したが秋草茫々の中に僅かに之を發見した爾來年を經て其の記憶も薄らいで居たが去大正十二年頃紀伊國伊都郡端塲村高野山下の住岡本彌氏が態々土佐に來國し余が草廬を尋ね來つたこは同氏が余の著書を讀んで余が名を識つた爲である

然して自らいふに余が家は長宗我部氏の子孫である長宗我部氏は土佐の長岡郡より興つたといふより其の地名一字を取つて岡本と稱して居る高野山上信親の墓は今に現存し自分は時々登山し苔を掃ふて之を拜す土佐は祖先出自の國といふより之を慕ふて來國せりと余は氏の志の殊勝なるを感じ色々長宗我部の遺跡を說明し其の指導をなしてやつたが高野山上に當時の墓尙現存せるを聞き又心中竊かに嬉しく感じた

今年昭和二年の夏予は東遊歸途八月五日を以て再び高野に登山し今回は金剛三昧院に投宿し同院執事沼龍靜氏の紹介を以て高野山事務所松木三四郎氏に面し長宗我部氏墓所の存否を探ぐり愈其の奧院左側中橋の手前にあるべきことを確め案内童子並に一橋寫眞師を携へ共に之を探りた

奧之院はいふまでもなく山内にても倔指の靈境にて樹齡二三百年の杉檜數百丁本林立天を摩し翠柯縱橫天日を遮り一塵飛び至らず絕塵の淨境である左右に六十六ケ國大名の大小五輪塔駢立又其の數を知らず然して塔は皆青苔蒸蝕し古色掬くすべし行くこと數町にして漸く達す記錄に照らし探ぐれば長宗我部氏の墓地

面左の如し

奧院左側

上壇

土佐長宗我部氏墓

下壇

伊勢津藤堂家墓
筑後久留米有馬家墓
參州岡崎本多家墓

道路

此の長宗我部氏の墓は木標又文字なき故直に發見し難きも高野山記錄の指定に從へば正しく此に該當す昔の土佐軍記や元親記に記載の當時は下壇の諸大名の墓は未だ無く要するに當時の高野山奧院は極めて寂寞にして閑地多く長宗我部氏も此に墓を卜し妙堂を建て五輪塔を置き或は石燈籠を添へ壯嚴の体を極めしならんも一日斷絕の後は墓も毀たれ五輪も移され上壇の空地に僅かに其の面影を留むるに至りしものと考へらる

現時其の墓域は廣五六坪許り山根に添ひて高四尺內外の五輪塔五六箇相並ぶ其中屋根石の角の上りて居るは後世の作なれば屋根石の角の下りて居る物こそ當時の眞物なるべしと認む尙予は翌六日の朝金剛三昧院住職久利姓呈師に面會し金剛三昧院は土佐に緣故深し長宗我部墓域の保存並觀光客の指導は宜しく貴寺に依賴すと申しければ久利師も快よく承諾ありき

578
43

要するに四百年前戸次川合戰當時の長宗我部將卒の墓今尚髣髴として高野山上に存するは奇といふべし高山寂寞として老樹天を鎖ざし青苔常に濕を帶ぶる墓域英魂毅魄の猶生けるが如く彷徨ふ樣を想倒する時は感慨無量誰か袖を沾さざらむ況んや長宗我部氏の鄕國に生れ日頃其の英風を慕ふ何ぞ一片懷古の感なきを得んやであるここに高野山上長宗我部氏墓所の現況を錄して更に末世の參考に供する

土佐好古史談　大尾

昭和二年十月卅一日印刷
昭和二年十一月十日發行

定價　壹圓八拾錢

著者　高知市南新町四十四番屋敷　寺石正路

發行者　高知市桝形三百八十八番地　日川島新保次郎館

印刷者　高知市本町筋四丁目百貳拾七番地　野町傳次

印刷所　高知市本町筋四丁目百貳拾七番地　野町印刷所

不許複製

576
43

578
43

578
43

578
43

578
43

[illegible]